



砂山と松林の先に建設中のコンビナートが見える(昭和44年頃)



園芸農業の導入が推進され、ピーマンの栽培が進む



開港記念式典挙行(昭和44年10月)



現在の鹿島臨海工業地帯

昭和43年には港湾計画が再検討され、20万トン級の船舶が入港できるよう航路や防波堤の増強が決定。Y字型の航路をつくる南航路・北航路の掘削工事が始まったのは開港翌年からです。

その後、鉄鋼や石油化学、飼料、木材などの進出企業が続々と操業を開始し、令和6(2024)年の鹿島港の取扱貨物量は5388万トン、令和5(2023)年の神栖市の製造品出荷額は約2兆円と県内1位。特に穀物類の取扱量は国内1位で、国際バルク戦略港湾に選定されました。また、物流機能の充実、洋上再生可能エネルギーの基地港湾の整備など、開港から60年近く経った今も成長を続けています。

細田さんは「鹿島開発から60年を一つの転換点と捉え、若い世代にこれからの神栖市を動かしてほしい」と力強いエールを送ります。ご自身も、「臨海工業地帯の中で心安らげる緑地を守りたい」と、意欲的に神之池緑地の整備活動に取り組んでいます。

神栖市の市制施行20周年を迎えるにあたり、改めて市の一大転換点となった鹿島開発の歩みを振り返りました。

待していたし、地域が発展するのは良いことだと思って見ていましたね。うちは自宅と水田の一部が南航路のエリアだったので、移転の対象となりました。それでも残りの水田はいままで通りで、神之池の水を利用して現在も米作りを続けています」

ピーマン日本一への第一歩

奥野谷地区では農業団地の造成が進んでいました。

「白砂青松の松を伐採し、モータースクレーパーで砂山を崩して農業団地が造成されたのですが、乾けば砂が舞って、まるで砂漠にいるようにでした。サッシのレールに砂がたまり、

洗濯物も砂まみれになってしまっただけ。農業用のビニールハウスに洗濯物を干していた人もいたんですよ。雨が降ると海抜7メートルの土地でも水たまりができて大変でした」

当時、農業の近代化も図られました。移転によって耕作面積が減る農家に対し、県は施設園芸を導入するための奨励金を出しました。細田さんは昭和42(1967)年に農業資材店を開業したといいます。

「農工商全で、ビニールハウスへの転換が急速に進みました。砂地なのでスイカ、メロン、ピーマンなどの栽培に適しているし、ビニールハウスで促成栽培をすれば通常より早く

い時期に出荷できて高く売れます。前向きに取り組んだ農家はどんどん発展していきました。農業資材店の仕事も、一時期は注文に追いつかないほど忙しかったですね」

これをきっかけにピーマン日本一の産地へと成長していくこととなります。

進化と成長を続けるまち

こうして昭和44(1969)年8月1日、ついに鹿島港が開港。10万トン級の船舶が入港できる掘込式港湾の完成は、世界の注目を集めました。しかしこの時点では、鹿島港は産声を上げたに過ぎません。前年の



地面の切削と敷きならしをおこなう、当時最新鋭の自走式建設機械モータースクレーパーを使用。大量の土砂を迅速に掘削、運搬した(昭和46年頃)モータースクレーパー▶



中央航路の掘り込みが始まる(昭和40年頃)



ベルコン通り



神之池の埋め立て風景

発のスケールに圧倒されます。これら中央航路の掘削と浚渫によって出た土砂の量は、昭和42年度末までに東京ドーム約5杯分の650万m³に達しています。膨大な土砂の一部は、総延長8キロメートルの大型ベルトコンベアで運搬。今でも地元では、知手交差点から東部コンビナートへ伸びる道路は「ベルコン通り」と呼ばれています。

さて、中央航路の掘り込みは波の影響を受けないよう、海岸部を残してその内側で進められました。が、南防波堤の建設が進んだ昭和43(1968)年、海岸部を切り開いて外洋と中央航路がつながりました。

このとき中央航路入口の北側に、まるで出島のように残ったのが、海岸の一部だった居切島です。この居切島は、鹿島港が大規模な掘込式港湾として建設されたことを、今に伝える証しとされています。面積約3ヘクタールの小さい島に、現在は鹿島水先区水先人会と茨城ポートラジオ



居切島

局があり、船舶の安全な航行を支えています。

神之池の埋め立てと米作り

鹿島開発が始まり、まちの様子や農工商全の「農」はどのように変わったのでしょうか。当時を知る元神栖市助役の細田精吉さん(83)に話を聞きました。

「うちは米農家で、祖父が神之池で漁業もしていたので、子どもの頃はよく祖父について行って、池で顔を洗ったり泳いだりしていました。近くには海軍神之池航空基地があり、国有地が点在している土地でした。高校を卒業後は、父と一緒に米作りに従事。この辺りは陸の孤島とか不毛の大地といわれていましたが、住民はそんなふうには思っていないませんでした。稲作は安定していましたから」

昭和43年には神之池の埋め立て工事が始まりました。細田さんはどのような思いで変わりで池の姿を見ていたのでしょうか？

「まず神之池を仕切って、農業調整池を確保した上で埋め立てられました。当時20代の私は鹿島開発に期



細田さん